

農学はいま、持続可能な社会の実現に欠かせない実践学となっています。ここではインタビューを通じて、農学生命科学研究科に学ぶ現役学生と、弥生キャンパスを巣立った先輩たちのいまをご紹介します。

ON THE CAMPUS



益子 櫻 Sakura Masuko

放射線動物科学研究室 2019年博士課程進学

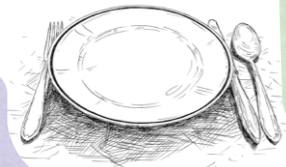
小学生の頃、自分が食べられるものであっても、それを食べられない友達がいることに疑問を抱いていました。高校1年の時、運動誘発性アレルギーを持つ友人が、部活動の練習中にアレルギー症状を引き起こし、緊急搬送されたことに衝撃を受けました。食物アレルギーを持つ人は、特定の食品が食べられないことに加え、生命の危機にさらされることもあります。このような経験から、食物アレルギーを持つ人、その家族のために何かできることはないだろうかと思いました。食物アレルギーに関する研究を行なっている機関はとて少なく、大学院受験を機に、現在の研究室へ進学しました。現在は、食物アレルギーの簡便な検査キットを作るため、日々、研究を行なっています。将来の進路は、まだ迷っていますが、今の研究を社会に還元するために起業という選択肢も考えています。



伊藤 遥 Haruka Ito

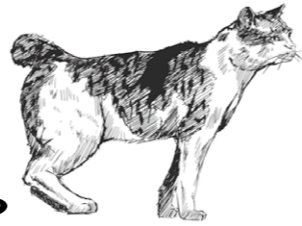
応用遺伝学研究室 2019年博士課程進学

小さい頃から雌雄の違いに関心があり、小学校4年の自由研究では公園で蝉の抜け殻を集めて雌雄の判別をし、その比率や場所による違いを調べたこともありました。高校で興味を抱いたのも生物。たとえば三毛猫はほとんどがメスだという事実を遺伝学的に説明できるのを知り、雌雄の違いが緻密に制御されているメカニズムをさらに知りたいと思うようになりました。今の研究室を選んだのもこうした探求心の延長線上にあると言えるかもしれません。農学が実学と密接につながっているのも魅力でした。現在は卵巣の中で重要な役割を果たしている遺伝子の研究を行っていますが、将来的には女性の不妊治療などに役立つのではと思います。実はこの分野はまだまだブラックボックス状態。研究者である以上、大きな発見や注目が集められるような成果を沢山生み出していきたいです。



食物アレルギーをなくしたい

夢はノーベル賞



農学が実学である強み

今やPh.Dは不可欠



新薬開発のコアメンバーに

研究成果を社会に還元したい

Q なぜ応用動物科学を選んだの？

Why have you chosen Department of Animal Resource Sciences?



谷 瑠依子 Ruiiko Tani

細胞生化学研究室 2018年博士課程進学

私は修士を2年で卒業し、外資系製薬会社に就職しました。その2年後、会社勤務を続けながら今の研究室に戻ってきました。時間の管理が大変ですが、コアタイムのないフレックスタイム制の勤務なので、なんとか調整しています。現在の仕事は新薬の開発。一方、研究室では遺伝子の発現制御を司るエピジェネティクスの研究に取り組んでいます。いわゆる基礎研究ですから、会社の仕事と直結するわけではありません。しかし開発職であっても常に科学的な思考、論理的な思考が求められ、それを社内で養うのは困難。自分の仕事の下地としてPh.D(博士号)は不可欠であることに気づきました。欧米のカウンターパートの方々もたいいていPh.Dは取得しています。将来は研究室で学んだ経験を生かし、新薬開発プロジェクトの中心となって仕事をしたいと考えています。



詳しくは、東京大学 大学院農学生命科学研究科 応用動物科学専攻 <http://www.ar.a.u-tokyo.ac.jp/>

IN THE SOCIETY

卒業生人名録 05

グローバル化と真のガラパゴス化の両立を 日本のモノづくりの未来は明るい

ライオン株式会社 代表取締役 社長執行役員 掬川 正純

ライオン入社後は まず研究所に配属されました。

私が入ったのは界面活性剤の合成や物性を研究する部門でしたが、皆さん大学で界面化学を専攻されているような方ばかりで、私よりはるかに知識量も豊富、実験も上手なわけです。最初の3年間は関連する教科書や文献を必死に読み漁りました。朝の始業前もお昼休みもひたすら独習。研究所時代、先輩に言われた言葉で印象に残っているのは「後輩には全人格をもって当たれ」。どんなに取り繕っても相手にはわかる。だから喜びも怒りもすべてさらけ出してコミュニケーションを取れと、私に伝えたかったのだと思います。自分が部下を持つようになって初めてその言葉の意味を理解できました。

仕事の上での転機は？

入社して6、7年目、ちょうど30歳になった頃でした。文献からシリカ粉末の製造法を見つけ出し、その成分を使って制汗剤スプレーを開発したことがありました。製品化によって生まれた売上はわずか800万円でしたが、私にはかけがえのない体験でした。というのもピーカースケールの研究から工場での生産まで弊社の業務の一連の流れをすべて経験できたからです。工場の製造設備の配線や配管はもちろん、慣れない原価計算や労務管理も自分たちで行いました。そして完成した製品が店頭並び、お客様が購入する光景を見たときの興奮は忘れられないですね。この仕事の醍醐味を実感しました。



PROFILE

掬川 正純 Masazumi Kikukawa 1959年神奈川県生まれ。1984年東京大学農学部卒業、同年ライオン入社。2006年から研究開発本部ファブリックケア研究所長として洗濯用洗剤「トップNANOX(ナノックス)」などの開発を担当する。2010年執行役員、2012年取締役、2018年代表取締役、専務執行役員。2019年1月から代表取締役、社長執行役員、最高執行責任者に就任。



好きな言葉を教えてください。

「一喜一憂」です。会社の仕事とはいわばチームです仕事。チームには必ず達成すべき中長期の目標があるわけですから、途中にいくつものマイルストーンを置き、そこに予定通り到達したら、盛大に喜びを分かち合えばいい。逆に到達できなかったら盛大に反省すればいい。よく一喜一憂すると言われるんですが、仕事が万事順調に行くことはまずありません。「一喜」という山もあれば、「一憂」という谷もあります。その起伏を楽しむようなチームマネジメントが必要だと思います。私自身は率いるチームがすっかり大きくなりましたが、一喜一憂を楽しもうという気持ちは今も変わっていません。

日本の産業の未来をどうお考えですか。

日本的なモノづくり、日本食、日本の伝統文化…。日本人



の豊かな感性と緻密な作業に支えられた製品は世界中からリスペクトされています。ひと頃、ガラパゴス化という言葉が否定的な意味で使われましたが、私はガラパゴス化がまだまだ不十分だったと考えています。

日本社会というユニークな環境に徹底的に適応できれば、日本のモノづくりの未来はもっと明るいものになるはずですよ。たとえば超高齢社会。そこに適応するモノづくりや文化を育てれば、将来的には必ずアジアやヨーロッパでのビジネスにもつながるでしょう。日本のユニークネスとその素晴らしさを再認識し、研ぎ澄ましていく——これからの日本のモノづくりや研究分野で活躍される方はその視点を大事にしてほしいですね。

